

## 真田信繁（幸村）の息子真田幸晴伝説の解明

会員 河村 康 夫

## 1. はじめに

真田信繁（幸村）は信州（長野県）上田城主真田昌幸の次男で、慶長二十年（1615）大坂夏の陣で豊臣方の武将として徳川家康を窮地に追い込んだものの討ち死にした。のちに「日本一の兵」と称賛された武将である。

この真田信繁（幸村）の息子が、大坂夏の陣のおり、九州を目指し、船で落ち延びる途中、周南市沖で遭難し、その後、櫛浜地区に永住したと伝わっている。このたび、これが単なる伝説ではない信憑性を高める事を示す史料が見つかったので、櫛浜郷土史会（会長 村井洋一）を代表して報告する。

## 2. 真田幸晴伝説の発端

JR櫛ヶ浜駅の裏手、久米院内の洞庭山原江寺の境内に大坂夏の陣で討死にした真田信繁（幸村）の息子、幸晴夫婦と言われる墓、後裔河村幸雄が建立した石碑がある（写真1、2）。

碑文表には「幸村幸晴君夫婦之墳」、裏には「幸晴君俗称理右衛門尉真田幸村君之末男也、寛文六年十月廿六日病歿于栗屋村、妻君者同村農茂八之女、延宝九年正月十日歿焉、今茲明治三十二年十一月、九世之孫従六位勲六等河村幸雄建立」（注：寛文六年は1666年、延宝九年は1681年）と刻まれている。この碑の存在が

「真田幸晴」伝説の始まりとなった。

後に、この話は「都濃郡誌全」（大正13年発刊）「太華案内」（昭和2年発刊）や山口県寺院沿革史（昭和8発刊）（写真3）で紹介された。

### 3. 新たな史料の発見

横浜郷土史会では、昭和60年に放送されたNHK大河ドラマ「真田太平記」の頃より約40年に渡りこの伝説の解明に取り組んできたが、平成28年1月から再調査を行った。

まず、この碑の建立者「河村幸雄」なる人物は何者か。従六位勲六等叙勲を手掛かりに、内閣府賞勲局の協力を得て、その人物は判事と判明した。しかし、当時の司法省の記録は不明で、一旦調査は暗礁に乗り上げたもの運よく、旧徳山藩士に辿り着いた（第1表）。そこで、徳山毛利藩の河村家譜録を調査すると本家筋となる「吉村理右衛門譜録（文化12（1815）年）」（徳山毛利家文庫；山口県文書館所蔵、写真4）等に幸晴の記述（譜

録1編；吉村右門（寛政3（1791）年）があった。

「祖父吉村左太郎後改理右衛門幸晴、父幸村与兄大助幸昌於大坂討死、其以前豊州小倉城主細川家藩中有由緒之者通、潜書而可下左太郎契約有之子、時左太郎三歳乳母并股臣大熊九助介抱之、慶長廿年四月二十四日出帆于摂州大阪而至于豊州小倉、同五月四日於御領馬島之沖大風俄然而波涛接天、櫓折樯摧而棹主無力船浮沈而漸漂着馬島之海岸、於此大熊九助早以纜欲繫船飛石岸不得其上誤溺死舟人共溺死矣、于時乳母左手懷左太郎右手握船梁而偏念神、有須更風靜後止舟於岩窟登石岸、欲近人家路辺有賊天曹曰女人、可有懷宝速可出若旅違背者可終一命云、乳母曰某等逢難風家人溺死附屬之隱宝尽失、之今幸児子之守護幣之内有寅金汐可与之と云、賊潤色而欲奪之、乳母潛以懷中之劍突賊被突大驚怖而逃去也、而後以方便御領平野浦暫住居左太郎長後下小倉而遊足、城主聞左太郎義欲賜食録左太郎、以有父遺言不許容之因而長男治郎兵衛信之勤仕、乳母者左太郎下小倉之節御領栗屋村農民河村某娶之、其由緒左太郎従下小倉引越于此地築潮干潟

二十町、而為田地耘耜而慰性永住居干茲」。

要約すると、「祖父の吉村左太郎後の理右衛門幸晴について、大坂夏の陣で父幸村と兄大助を失った幸村の遺児3歳の左太郎は、大坂夏の陣の最中、慶長20年旧暦の4月24日に、かねてから密約していた豊前小倉城主細川忠興の者を頼って、乳母と家臣大熊九助と共に、大坂を出帆したものの、5月4日、周南市馬島沖で大風にあい遭難し、家来の死や盗賊の災難に会いながらも、周南市富田の平野浦に数年身を隠した。その後、細川家の者を頼って、九州に下り小倉に3年滞在した。その時に、城主（徳山毛利藩初代毛利就隆公？）が左太郎のことを聞き、義を欲し食録を与えると申し出たが、左太郎は父（幸村）の遺言を守りこれを受けず、長男治郎兵衛信之が仕えた。小倉に下った際、左太郎の乳母が御領栗屋村の農民河村某に娶られ、左太郎もこれに従い小倉を引越した。そして、この地（栗屋村）で干潟20町を開作し永住した。」との内容である（注…傍線は河村栄之丞譜録の記述）。

真田幸晴とその息子吉村（後に河村と改姓）長右衛門幸正は一生浪人だった。孫吉村通庵の代に、馬廻医師50石として徳山毛利藩に仕官した。吉村通庵の弟二人も河村姓で仕官し、その後分家を立て廃藩置県まで続いた（第2表）。

#### 4. 地元に残る伝承等

櫛ヶ浜地区に隣接する栗屋地区には「共に逃れてきた者に刀鍛冶がおり栗屋の教学院（現在の曹洞宗吉祥院）下で鍛冶屋を営んだ。幸晴も長じて農具等の鍛冶屋を営む。ただし追手を避け、真田を名乗らず河村幸晴と称した。ちようど毛利氏の農地開発食糧増産奨励のときであり、農具の生産修理は繁盛を極めた。依って河村（真田）幸晴居宅辺は小字鍛冶屋河内と呼ばれるようになり近くの川は鍛冶屋川と呼ばれるようになった。」との伝承が残っている。この教学院は山伏寺である。真田信繁（幸村）が大坂城入りの際、山伏の姿で伝心月叟を名乗ったことや、信州の真田家は父真田昌幸の頃、信州修験道の

西阿山の山伏と親しかつた等を考えると関連が想像される。

また、幸晴夫婦と言われる墓がある原江寺近くのJ R 櫛ヶ浜駅前にある橋本医院には六文銭紋の付いた甲冑（兜の両側と両手甲の4カ所に六文銭紋）と采配が伝わっている（写真5）。この家の先祖は明治の初めまで櫛ヶ浜地区にあった山伏、修験道快照院の顔役だった。真田幸晴の子孫、本家の河村（吉村）家は安全のため、真田幸村ゆかりの甲冑等を、分家のこの家に預けたとの口伝がある。最近の調査でこの甲冑は江戸時代初期から中期の作で、真田信繁（幸村）ゆかりではないものの、上士の家に伝わる上級品であるようだ。

## 5. 史料（譜録）等から浮かび上がった謎

(1) 真田幸晴は存在したのか？

この真田幸晴だが、全国的にはほとんど知られず、真田家の系図にも載っていない。側室か名もなき女性との間にできた子なのか。大坂夏の陣当時、3歳の幸晴は左

太郎を名乗っていた。真田信繁（幸村）の側室豊臣（三好）秀次（秀吉の姉の子で豊臣秀吉の養嗣子となった）の娘、隆性院には系図に残る男子「三好幸信」がいる。大坂夏の陣の後に生まれ、幼名は左次郎という。左太郎と似た名である。「幸晴」と「幸信」の最後の字をつなげると「晴信」となる。旧主君「武田晴信（信玄）」にちなんだ名前とも推測できる。また、隆性院との関係も考えられる。

(2) 「真田幸村」の呼称は、後世の創作なのか？

「真田幸村」の名が初めて見られたのは大坂夏の陣が終り60年近く経った寛文12（1672）年に刊行された軍記物の「難波戦記」であるとされ、「真田幸村」の呼称は、後世の創作なのではないかとも言われている。しかし、今回発見した史料の譜録には全て「幸村」の名が記されていた。真田幸晴は寛永（1624-45）年間に姓を変えた。「真田」から父「幸村」にちなみ、「幸」を「よし」と読み、「幸村（よしむら）」とし、さらに同じ音の「吉」の字をあて吉村姓を名乗った。その後、寛

文(1661-72) 年間に子の吉村長右衛門幸正が河村に改姓したとある(写真6; 「河村栄之丞」譜録。ちなみに、河村は乳母の嫁ぎ先の姓)。このことから、「幸村(よしむら)、吉村」姓の存在が、真田信繁が「真田幸村(ゆきむら)」を名乗った事実の裏付けにもなると考ええる。

(3) 真田幸村の嫡男、真田大助は生きていた? 共通する名前

松代藩真田家(兄真田信之の家系)の正史である「真田家御事蹟稿」の左衛門佐君伝記稿に「真田大助」の記述がある。「大助は大坂城では自刃せず、夏の陣の後浪人となり塚に居住し、真田長左衛門幸正と名乗っていたが、のちに高井四郎左衛門の養子となって高井姓に改姓した。」との記述がある。この家系は後に八木姓となり徳川家の旗本となった。真田大助は、「真田長左衛門幸正」と名乗り、真田幸晴の息子の名は、「吉村長右衛門幸正」である。両者の名前が類似している。また、「幸正」は、真田信繁(幸村)の父「昌幸」の名を逆さ

に並び替えた名前だとも推測でき、真田家との関連を伺わせる。

(4) 栗屋村農民河村某とは何者か?

河村は乳母の嫁ぎ先で、左太郎も一緒に栗屋村に付いて行つた。左太郎の養父の可能性もある。栗屋村の「河村某」については、子孫に該当する家系は存在しておらず、幸晴の妻の実家である栗屋村農茂八と共に、今後の調査が期待される。

(5) 真田幸晴はキリシタンであつたのか?

真田信繁(幸村)はキリシタンで、洗礼名が「真田フランコ」という説もある(イエズス会著…十六、七世紀イエズス会日本報告書)。

原江寺にあつた幸晴の墓石は現在行方不明であるが、過去に撮られた写真から幸晴と妻の墓石が雲紋形であることと戒名(幸晴…泉巖宗徹禅定門、妻…一空存負信女靈位)に泉や空の字があることから、キリシタンだったのではないかの指摘がある。

(6) 台座に六文銭を刻んだ地蔵は誰のものか?

平成15年頃に当会会員によって原江寺墓地内で「台座に六文銭を刻んだ地蔵」(写真7)が発見された。台座には「仲山幻童子、俗名吉村源太郎、享保六年・」の文字が読み取れる。当初は誰の地蔵かわからなかったが、今回の史料で、徳山藩士吉村家の関係者であることが推測できる。

## 6. 終わりに

冒頭の河村幸雄の補足であるが、慶応元年(1865)9月9日付けの徳山藩有志血盟書に河村靖之進幸虎(幸雄)の血判があることから、四境戦争・戊辰戦争等討幕に長州藩士として参戦した可能性が高く、250年の時を経て、先祖信繁(幸村)の徳川家への仇を返したことになる。

NHK大河ドラマ「真田丸」が始まった平成28年に、この伝説の信憑性を高める史料が発見できたことに運命の糸を感じるが、史実裏付がない限り伝説の域を出ない。現在、一次史料の発掘や子孫の搜索に取り組んでおり、

今回は第1報とする。

〔参考文献〕

「横浜郷土史会HP」横浜郷土史会

「徳山藩ドットコム」栗崎健

「徳山毛利家文庫譜録(吉村理右衛門、河村栄之丞、河

村弥市、河村文太) 山口県文書館

「徳山市史史料」、「都濃郡誌全」、「太華案内」、「山口県

寺院沿革史」

第1表 河村幸雄の経歴

徳山毛利藩士 持弓15石

○慶応元（1865）年9月9日 徳山藩有志血盟書に河村靖之進幸虎（幸雄）の血判を捺す

\* 四境戦争・戊辰戦争等の討幕に長州藩士として参戦した可能性が高い

○明治3（1870）年 譜録提出 28歳

○明治5（1872）年 東京府・芝の増上寺内の開拓使仮学校（北海道大学前身）明治政府官員

○明治14（1881）年10月 「明治建白書集成」の刊行に参加（関係箇所：七四上〔大隈元参議二組スルモノ一掃ノ儀〕）

○明治19（1886）年7月3日 千葉重罪裁判所検事

○明治21（1888）年 「明治法規大全」著 福岡始審裁判所奏任判事

○明治22（1889）年11月25日 「日本刑法講義録」著

○明治23（1890）年 八戸治安裁判所判事

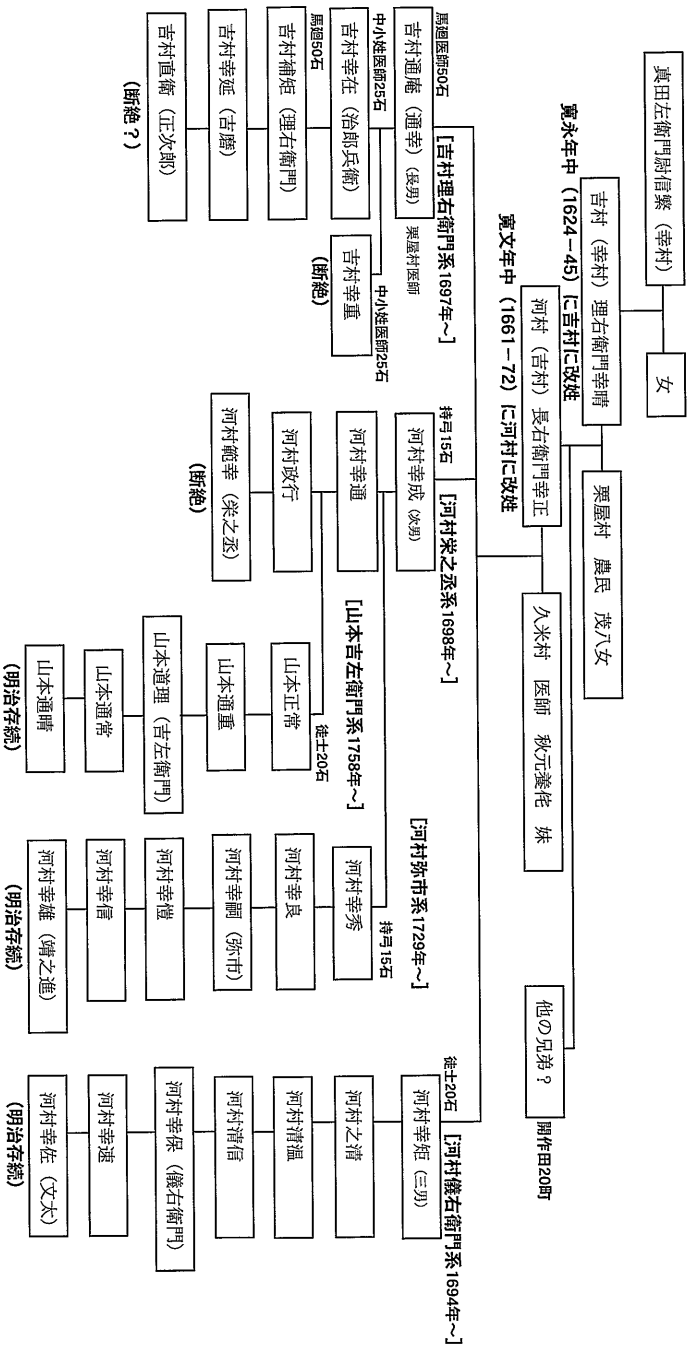
○明治23（1890）年9月 長崎控訴院判事

○明治24（1891）年6月27日 勲六等叙勲（内閣府賞勲局調べ）

○明治32（1899）年11月 原江寺に真田幸晴の夫婦の石碑を建立

## 第2表 真田幸晴家系図

榎浜郷土史会作成



[参考]徳山毛利家文庫譜録、徳山藩トットコム





写真1 幸晴夫婦の石碑と関係者の墓石（移設後の現在）



写真2 当時の幸晴夫婦の墓  
（「大華案内」より）

當山後山に眞田幸村の子幸村幸晴の墓あり、大阪城落の際眞田幸村の子を糧に連れて九州に渡らんとする際野島方面に着船して遂に此地に止まりて養育せりと時に幸村を名乗る事を避けて河村と改名せり今尙其末裔ありといふ。

石碑の表は、幸村幸晴君夫婦之墳  
裏は、幸晴君俗稱理右衛門尉幸村君之末男也、寛文六年十月廿六日病歿于

栗屋村妾君者同村農茂八之女、延寶九年正月十日歿焉  
今茲明、明治卅二年十一月九世之孫、從六位勳六等、  
河村幸雄建立

又年紀不詳なるも幸晴の兄弟の某か幸晴の事を尋ね來りて此の墳墓に對し右に歸一寶存貞女靈位、延寶九年正月十日、左に泉巖宗徹禪定門寛文六年十月廿六日と記して墓碑を建てゝ立去りぬ。

写真3 「山口県寺院沿革史」  
の記述

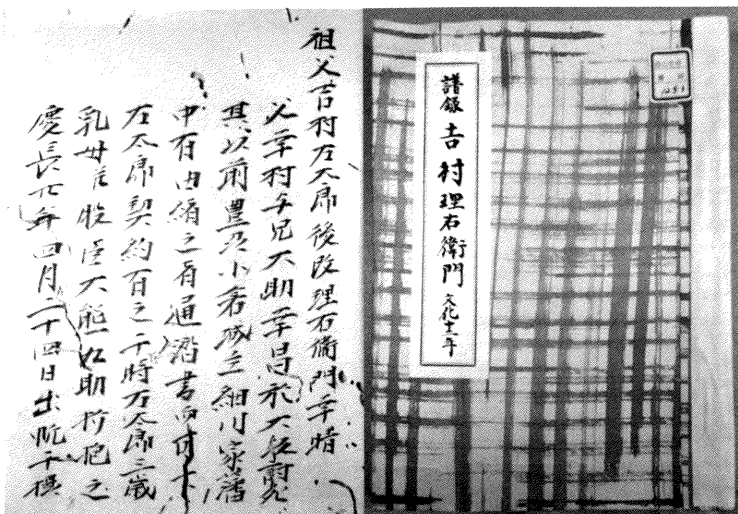


写真4 吉村理右衛門譜録（一部）



写真5 甲冑・采配と六文銭の家紋

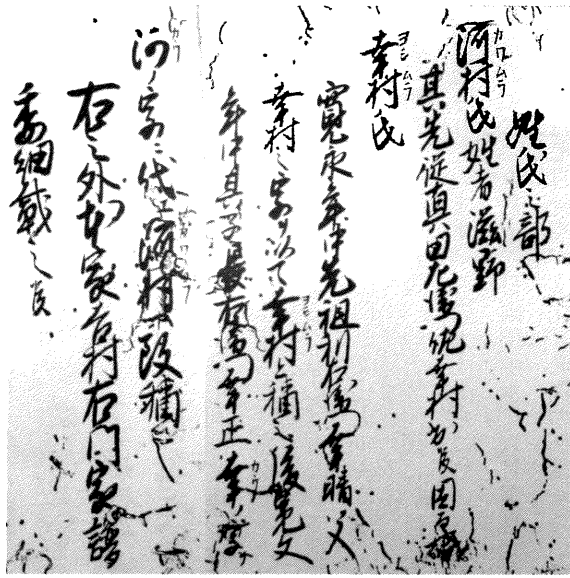


写真6 河村栄之丞譜録（関係部分）



写真7 台座に六文銭を刻んだ地藏